



佐渡一毅 の ドレッサージュトレーニング

2021年6月

vol.22

◆ 東京オリンピック代表選考 最終競技

いよいよ東京オリンピック代表選考も大詰め、日馬連主催の選考競技会を残すのみとなりました。1週間前には、Ludwigとともにフランスで行われた CDIO5* Compiègne に出場し、確かな手応えを得ており、良い状態で最終選考競技に向かうことができました。

オリンピック代表選考は、当初は14名28頭が参加意思を表明していましたが、最終選考競技に参加したのは5名7頭でした。私は Ludwig と Barolo の2頭で挑戦し、成績は好調でしたが、怪我や病気はいつ起こるかわからないので、最後までできる限りの準備とケアを尽くして臨みました。

Ludwig

前週のフランスの競技会でしっかりと調整ができた Ludwig は、これまでの中で最も良い状態でした。今までのトレーニングでは、競技本番と比べると動きに物足りなさを感じていましたが、フランスの競技後はトレーニングでも本番と同じように動いてくれていたため、あまりハードなトレーニングはせずに動きと人馬の関係の確認のみしていました。しかし、入厩日のトレーニングでは馬がオススケを出して素直にスルーしない、脚に反抗するなどの悪癖を見せ、厩舎でのトレーニングほど素直に従いませんでした。しかし、この悪癖に対しては試行錯誤を繰り返して解決方法を学んできていたので、落ち着いて対処し、しっかりと馬をまとめることができました。

馬の調子は良かったのですが、一切の油断はせず、「攻め切る姿勢」で本番に臨みました。本番では終始、馬と良い関係で演技ができて大きなミスはありませんでした。しかし、バッサージュはトレーニングでできていたものほどクリアではありませんでした。この課題については、まだ経路内で私の要求が低いことが原因かもしれません。これ以上要求するとイレギュラーになると勝手に決めつけていて、扶助が弱くなっているのかもしれません。点数自体は決して悪くありませんが、トレーニングと同様のクオリティのバッサージュではありませんでした。また、駆歩もやや急ぎ過ぎだと指摘もありました。そこまで力がある馬ではないため、どうしても動いている中でスルーさせる必要があり、これ以上ゆっくりしようとすると後軸のパワーまで弱くなってしまうので注意が必要です。トレーナーの Imke からは「急いでいるように見えても、この馬をまとめておくためには何かを大きく変える必要はないので、この関係を崩さないように歩幅を大きくリズムをゆっくりできるようにトレーニングする必要がある」とアドバイスをもらいました。

しかし、それでも評価は高く、馬のベストスコアである71%を超える成績で初日を終えることができました。この結果により Ludwig の1位通過はほぼ決定となつたので、2日目は出場せず棄権することにしました。

Barolo

Barolo は前週のフランスの競技を回避して、十分な準備をして選考会に出場する予定でしたが、私がフランスに行く際に踏み掛けをして小さな怪我をしてしまい、トレーニングがやや不足している状況でした。フランスの競技後に1週間の短期間で少し急ピッチで仕上げなければならない状況になってしましましたが、厩舎での最終日のトレーニングでは十分競技会で通用する状態に戻っていました。

入厩日のトレーニングでは、少しそこから後退して良い状態とは言えませんでした。なぜかここまで簡単にできていた収縮体勢をなかなか取れず、身体がスルーしきれていない感覚でした。また、準備運動馬場の環境もこの馬にとっては難しいものでした。外でのトレーニングができず、インドアのみでした。今回のインドアは何の変哲もない馬場だったのですが、やや蒸し暑かったこともあったからか、最初は内にこもるような状況でした。それでも何とか最後にはしっかりと繋げることはできましたが、以前のように自主的にやってくれているという感覚ではありませんでした。競技当日は前日より体は柔らかくなっていてスルーもしやすい関係でした。準備運動では丁寧に運動を積み上げていき、確実にスルーした状態をキープできるように取り組みました。その成果もあり本番には何とか間に合ったという感覚で競技に臨むことができました。

経路では、結果的には大きなミスが一つあり、そこで大きく減点を負いました。ピルエットの前に、この駆歩では十分にスルーしていないと感じた私は強くブッシュしてしまい、それに馬が耐えられずに速歩になってしまったのでした。また、伸長速歩やバッサージュ・ピアップフェは普段のようなキレがなく、とても満足のいく内容ではありませんでした。しかし、ハーフパスや停止・後退、2歩毎・歩毎、ジグザグなどはこれまでの経験を生かして丁寧に確実にできていたため、これらの運動の点数はしっかりと取れました。また、調子が完璧ではないものの、ピアップフェや移行まで止まらずしっかりと動き続けていたことで、約68%と、普段と比べてそこまで成績を落とさずに初日を終えることができました。

2日目は馬の疲労が心配でしたが、朝の曳き馬ではまだフレッシュだったので、あと1日思い切って乗ることを決意しました。準備運動では前日同様に丁寧に馬の体勢を作っていくことに時間をかけ、Imke の提案で少し運動の組み立て方を変えて準備運動を行いました。競技本番では、前日よりも私の焦りも少なく視野も広く見渡せるように騎乗できました。動き自体に大きな変化はありませんでしたが、前日よりややリラックスして大事な場面でのみプレッシャーを与えて、ミスのないように、そして確実に運動を行えるよう非常に集中して騎乗することができました。今まで散々ミスを重ねてきたピアップフェやピルエット、歩毎なども乗り切り、大きなミスをすることなく演技を終えることができました。結果は69%で内容も満足のいくものではありません

でしたが、この時点でできるベストの演技だったと思います。

この選考競技会で4月に始まった選考対象の競技会は全て終わりました。総合成績は Ludwig が1位で代表候補馬、Barolo が2位で予備馬という結果で、ともに代表候補として選出されました。

✿ 選考期間を終えて

Barolo とは2017年12月末にトレーニングを開始し長い年月をかけて、この難しい馬のマネジメントや自身の騎乗技術の向上に務めました。それが今年になってようやく形になり始めました。2月のナショナル競技での70%を皮切りに、5月のExloo では CDI でも70%を超えることができました。選考会では少し失速してしまいましたが、これまでの経験のおかげで最後に 69%という評価をもらえ乗り切ることができました。

ようやくこのレベルまでたどり着きましたが、おそらくこの馬は今でも基本的に競技会が嫌いです。しかしここまで、少しずつ心を開いていき、少しずつ自信を持っていくことで、嫌いなことでも自分はできるのだと自信と勇気を持ってこの道のりを切り拓いてくれました。そして、共に積み上げてきたものを一生懸命演技として見せることができて、私たちはそれを70%の評価に繋げられるようになりました。ここまで頑張りが報われた嬉しさと感動は言葉に言い表せないほどです。Ludwig に負けてしまったことは残念でしたが、苦手なことをたくさん克服してきたこの馬をとても誇りに思います。

一方、Ludwig とは、春先の競技ではどうなることかと思っていましたが、競技を重ねるごとに自分でも驚くほどフィットしていく感覚がありました。Barolo とは正反対の性格で何にも臆せず心強いメンタルの持ち主ですが、それが行き過ぎると反抗したりホットになったりと、今までの経験で対処しきれない問題にぶつかりました。しかし、それを騎乗技術で解決することをこの馬からは教わりました。ホットだから優しく乗るという「逃げ」の騎乗から卒業することができたと思います。どのような体勢を作れば反抗させず、ホットになる暇もないほど集中させができるのかを学びました。そして、その技術が私をもう一つ上の世界へ連れて行ってくれることになったと思います。

結果だけを見れば最近の成績のことのように見えますが、私としては昨年のフロリダで初めて70%を取ったときに「これが

できれば70%を取れるのか」と感じた瞬間がありました。そこからそれを確実なものにするのに時間がかかりましたし、また失敗することもあると思いますが、この経験は次のステップアップへの大事な足掛かりになります。そして何より Ludwig 自身も Barolo と同様に多くの成長を見せてくれました。前ライダーが乗っていた時よりもパッサークルや駆歩、速歩のベースの動きは良くなっています。Ludwig 自身もここまでハードなトレーニングに励み、私たちの期待と要求に応えてくれたと思うと感謝しかありません。

そして、何よりここまで2頭と私と導いてくれたのはトレーナーの Imke です。彼女のトレーニングは非常に厳しくハードで細かいですが、誠心誠意、人と馬に素直に正しく接して指導してくれました。「私は東京オリンピックへ行きたい。これは私が JRA からオランダに来て、絶対に達成しなければならない仕事です」。そう話した4年前からこの想いを深く理解してくれ、何よりも優先して Barolo と Ludwig と私のトレーニングに付き合い、指導に取り組んでくれました。ここまで多くの失敗もしましたが、いつも前向きで決して諦めず、正しく指導してくれたおかげで、私は毎回背中を押されるように次へ向かうことができました。ここまで成果は彼女の協力なしでは成し得ませんでした。

選考競技会後、Imke は北原選手と林選手のトレーナーとともに喜びを分かち合い、トレーナー同士がこの大仕事をひとまずやり終えたことを称え合っていました。彼らにも大きなプレッシャーがあったことは容易に想像できます。日本チームのために尽力してくれている個人トレーナーたちにも心から感謝しています。

